

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520212
 研究課題名（和文） ルイ＝フェルディナン・セリーヌと同時代フランスの大衆雑誌
 研究課題名（英文） Louis-Ferdinand Céline and French contemporary popular magazines
 研究代表者 木下 樹親 (KINOSHITA MOTOCHIKA)
 九州大学・大学院人文科学研究院・専門研究員
 研究者番号：50380697

研究成果の概要：本研究では 20 世紀フランスの作家ルイ＝フェルディナン・セリーヌが参照していた同時代同国の大衆雑誌の記事を検討した。最大の発見は『ジュ・セ・トゥ』誌における天文学者兼小説家カミーユ・フラマリオンによる科学啓蒙記事と、パストゥール研究所所長イリヤ・イリイチ・メチニコフによる医学・衛生学に関する記事である。これらがセリーヌの初期小説における諸描写や医学博士号論文および衛生学的観点の源泉のひとつである可能性を指摘した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総 計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：（1）セリーヌ （2）フランス文学 （3）フランス大衆雑誌

1. 研究開始当初の背景

（1）本研究を開始するまで、研究代表者は主にルイ＝フェルディナン・セリーヌ（1894 - 1961）の作品における創作的想像力の諸相や道化的笑いについて研究を続けてきた。その過程で、掘り下げて考察する必要性を強く認識したのが、ベルエポックから第 1 次世界大戦終結頃までの時期に彼が執着を抱いていたという事実であった。それは単なる個人的なノスタルジーの対象であるだけでなく、作品の特異な登場人物や光景、皮肉めいた示唆的言説を練り上げるための素材を提供した

時代であった。

（2）とりわけこの時期に刊行されていたフランスの大衆雑誌『ジュ・セ・トゥ』『レクチュール・プール・トゥス』、および挿絵入り新聞『リリュストラシオン』は、当時の社会情勢や科学・文化に関する知識を普及させるうえで貢献した媒体であるが、セリーヌが参照していた情報源でもあった。例えば、誹謗文書『皆殺しのための戯言』と『死体の学校』が再版されたとき（それぞれ 1943、42 年）、彼は第 1 次世界大戦期の上記 3 誌から

採った写真を新たに挿入したし、中・後期の長編小説『またの日の夢物語』（1952 年）の先駆稿のひとつでこれらの雑誌を重視する一文を残している。

(3) 現実の素材の徹底的な変容を小説技法の支柱に掲げていたセリヌの創作過程に、同時代フランスの大衆雑誌の詳細な検討をとおしてメスを入れる研究はこれまで皆無であったと言ってよい。加えて、これらの雑誌が学術研究の対象になることはほとんどなかったため、20 世紀前半のフランス大衆文化の実態を探るうえでも、本研究の意義は大きい。以上が、本研究課題を申請した動機である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述のフランスの大衆雑誌『ジュ・セ・トゥ』『レクチュール・プール・トゥス』、および挿絵入り新聞『リリュストラシオン』の記事内容を調査し、セリヌの作品における諸描写との比較検討をとおして、彼の創作過程における源泉の一端を探求することにある。

3. 研究の方法

(1) 基礎資料体の確認・収集

基礎資料体は上述の 3 誌であるが、本研究課題が対象とする時期（一応の区切りとして 1900 年からの 20 年間）に刊行された巻号に限定し、以下の要領で調査・収集を行った。

『ジュ・セ・トゥ』誌については、フランス国立図書館のインターネットサイト・ガリカ Gallica (<http://gallica.bnf.fr/>) が公開している PDF ファイルの形で 1905 年の創刊号から 1920 年刊行分までをほぼ入手できた。さらに、PDF ファイル化されていない巻号の入手に努めた。

『レクチュール・プール・トゥス』誌については、1902 年から 1908 年の刊行分の合本を入手。さらに、いくつかの入手困難な巻号を含め、未入手の巻号の閲覧をフランス国立図書館で行った。

『リリュストラシオン』紙については、全号（1843 - 1944 年）を所蔵している福岡大学附属図書館を中心に、その他いくつかの図書館で閲覧作業を行った。

(2) 基礎資料体の読解と分析

① 初年度（2006 年度）

本研究課題が対象とする 20 年間の前半期に刊行された分の読解・分析にあてた。

② 2 年目（2007 年度）から最終年度（2008 年度）にかけて

本研究課題が対象とする 20 年間の後半期に刊行された分の読解・分析にあてた。また、次の 4. 研究成果(1) の冒頭に記したとおり、初年度に見出した重要人物カミーユ・フラマリオンによる記事が、本研究課題の対象期間を超え、1868 年から 1932 年まで『リリュストラシオン』紙に掲載されていたため、同紙については、念のため、期間を拡大して調査を進めた。

(3) 研究事項の最終整理と統合

抽出した重要記事とセリヌの作品とを比較対照し、影響関係を仮定し、考察した。必要に応じて、セリヌの書簡やインタビューも参照した。

4. 研究成果

(1) 主な成果

閲覧調査の結果、着目すべき記事を最も多く含む資料は『ジュ・セ・トゥ』誌だと判断し、本研究の中心的資料体として取り扱うことにした。一方、『リリュストラシオン』紙には、セリヌとの関連で非常に重要なカミーユ・フラマリオンによる記事が長期にわたって掲載されていたため、内容を調査した。その結果、ほとんどは天文学的事象を概説・紹介する記事であったが、わずかながら、セリヌとの思想上の類似性を読み取れる記事があった。これについては、次の①の中で言及する。また『レクチュール・プール・トゥス』誌は、のちに『ジュ・セ・トゥ』誌を吸収する同傾向の大衆雑誌であるが、残念ながら、セリヌとの密接な関連を示唆する記事は見出せなかった。

ついで、抽出した記事のうち、報告に値する重要なものを次の①、②に分類し、セリヌの作品や思想との関係についての考察結果をまとめる。

①天文学者兼小説家、さらにはオカルト研究家でもあるカミーユ・フラマリオン（1842 - 1925）による科学啓蒙記事。

カミーユ・フラマリオンは、ベストセラーとなった代表作『通俗天文学』（1879）をはじめ、多くの著作や記事をとおして、19 世紀フランスにおける天文学の普及に多大な貢献をし、レジオン・ドヌール勲章を授与された人物である。彼の名前は、セリヌの第 2 長編小説『なしくずしの死』（1936）の後半で、偉大な科学者としてたびたび言及されているが、研究上の注意が払われることはこれまでほとんどなかった。なぜならば、彼への言及は断片的であるし、物語の中で実質を伴って登場しているわけでもないからだ。そもそも、強烈な個性を付与された山師的登場人

物クルシアル・デ・ペレールの背景に隠れてしまったという点も、フラマリオンが全く目立たぬ理由のひとつである。

しかし、働きながら独学で大学入学資格を得たセリーヌが、同じく独学の徒であったフラマリオンに相当の共感を抱いていたことは間違いない。また、「私は〈大学者〉には夢中になるのです。心はフラマリオンの下っ端〔略〕というわけです」（セリーヌ、ジャン・ポーラン宛書簡、1950年9月2日付、Céline, *Lettres à la N.R.F.*, Paris : Gallimard, 1991, p. 108）という言葉から分かるように、セリーヌは後年に至るまで、この科学者に限りない敬意を表しているのである。

そこで、本研究の資料体を用いて、セリーヌがフラマリオンから受けたと思われる影響関係を検証した。まず、『ジュ・セ・トゥ』誌に掲載されたフラマリオン名義の記事は決して多くなく、確認できたものは次の9本であった。

- a. 「世界の終わり」、第1号、1905年2月15日、53-62頁。
- b. 「空の旅」、第30号、1907年7月15日、741-747頁。
- c. 「我々が翼をもつとき」、第32号、1907年9月15日、147-156頁。
- d. 「世界、無限の塵」、第42号、1908年7月15日、741-750頁。
- e. 「自然の怒り」、第49号、1909年2月15日、131-138頁。
- f. 「科学は地球を穿つ」、第54号、1909年7月15日、733-741頁。
- g. 「6千万キロメートルの深淵」、第57号、1909年10月15日、355-363頁。
- h. 「忍び寄る災禍」、第62号、1910年3月15日、172-182頁。
- i. 「宇宙の火災」、第63号、1910年4月15日、309-316頁。

さらに、『リリュストラシオン』紙に掲載されたフラマリオンの記事のうち、特記すべきものは、次の2本である。

- j. 「宇宙の始まりと終わり」（第1878号、1879年2月22日、118-122頁）。
- k. 「ある人種の消滅」（第1952号、1880年7月24日、62-63頁）。

大別すると、天文学関連の記事（a, b, d, g, i, j）と、地球上での科学的事象に関する記事（他の5本）に分類できるが、ここでは、フラマリオンの特徴を最もよく示している記事aを取り上げたい。これは、地球が滅亡するとしたら、いかなる原因が考えられるかを解説したエッセイである。一読すると、次の2点に気づく。すなわち、1. 客観的な科学記事であるにもかかわらず、詩的抒情性や文学的比喩、ブラックユーモアを滲ませた

文章が散見すること、2. キリスト教的でない終末論が提示されていること。なお、後者については、『リリュストラシオン』紙の記事jにおいても確認できる。

実は、この2つの特徴が、フラマリオンとセリーヌを結びつける接点なのである。特徴1の最たる例として、天体の誕生から滅亡に至る過程を人間の一生に喩えた箇所を挙げてみよう——「生まれたばかりの子供は〔略〕、複数階から成り、各窓に優れた射撃手が構えている家々が立ち並ぶ巨大な通りを辿らねばならない人物に比較される。彼にとっては、この通りをずっと踏破し、ほとんど至近距離から浴びせられる銃撃を避けることが肝要なのだ」（56頁）。銃撃をかいぐり、通りの終わりまで到達できるか、それとも途中で銃撃を受けて斃れるか。比喩表現の中ではあるが、人間が根本的に「死刑囚」（56頁）の刻印を受けているという考え方は、セリーヌ的想像力にきわめて近似している。あるいは、彗星の通過で大気の組成が変容し、人々が狂喜乱舞する事態の叙述において、「錯乱」や「途方もないサラバンド」（59頁）などのセリーヌそのもののとっていい語彙が用いられている。こうした点は、フラマリオンがセリーヌに及ぼした影響のひとつと見なしうるであろう。

一方、特徴2の例としては、「自然は復活への汲み尽くせぬ力を永久に蓄えている。すべては変わり、すべては変容する、しかしいかなるものも破壊はされぬ。星も世界もその灰から再生する。生は永遠なのだ」（62頁）とか、「人間の出来事は永遠の〈歴史〉の時計上では数秒のごとく過ぎるのである」（記事i、300頁）という文章が挙げられる。つまり、世界が滅亡するとしても、悲劇的に捉えるのではなく、永遠の時間の中での再生と創造を想定した独自の終末論なのである。こうした天文学的観点の影響は、『なしくずしの死』でクルシアルが開陳する宇宙論に反映されていると思われる。セリーヌが、クルシアルのモデルとなったラウル・マルキとの交流や著作から着想を得たであろうことは否定できないが、加えてフラマリオンの著作から影響を受けたことも十分に考えられるのではあるまいか。とりわけ『なしくずしの死』のいくつかの描写は、フラマリオンという触媒を通すことで、より明瞭な読解が可能となるように思われる。

②ロシア出身の微生物学者でパストゥール研究所所長を務めたイリヤ・イリイチ・メチニコフ（1845 - 1916）による医学・衛生学に関する記事。

イリヤ・イリイチ・メチニコフは、白血球の食菌現象の研究で知られ、1908年にノーベ

ル医学・生理学賞を受賞した免疫学者である。『ジュ・セ・トゥ』誌には、彼による記事が2本と、さらに他の執筆者によるパストゥール研究所に関する記事が1本確認できた。

- a. 「科学の殉難者たち」、第52号、1909年5月15日、457-465頁。
- b. 「コレラ」、第83号、1911年12月15日、665-674頁。
- c. ジョルジュ・シルベール、「パストゥール研究所の25周年」、第105号、1913年10月15日、469-475頁。

この中で特筆すべきは、記事 a であろう。これは、例えば、地動説を唱え、異端審問で有罪とされたガリレオ・ガリレイのように、科学史に名を残したものの、社会の無理解ゆえに苦難を強いられた学者の足跡を簡潔に紹介した記事である。ここでメチニコフは、現代の迫害者の好例として、産褥熱の原因を究明し、その予防に生涯を捧げたハンガリーの医師ゼンメルワイスを挙げている。言うまでもなく、セリーヌはこの医師について医学博士号論文を提出しており（1924年）、その着想の契機として、この記事を挙げることができるかもしれない。

さらに、メチニコフの同記事が、古代ローマの大プリニウスに言及している点も見落とせまい。セリーヌは、ヴェスヴィオ火山の大噴火の際、有毒ガスを吸引して絶命したこの博物学者に『またの日の夢物語 II』（1954）を捧げ、第2次世界大戦時のパリ空爆を噴火や洪水のイメージで満たしている。この記事については、イヴ・パジェスが博士論文の中で言及していることを付言しておく（Yves Pagès, *Les Résurgences de la sensibilité anarchiste d'avant 1914 dans l'œuvre de L.-F. Céline*, Université de Paris VII, 1991, pp. 212-213）。

また、パストゥール研究所の様子を伝える記事 c は、『夜の果てへの旅』において、同研究所をモデルとする機関の描写の相違や、セリーヌの想像力の方向性を考察するうえで寄与するであろう。

問題は、セリーヌがいつの時点でこれらの記事を読んでいたのかという点である。残念ながら、現存する諸資料（作品と先駆稿、書簡、インタビュー等）を見ても、ほとんど言及されていないため、実証的かつ明確な結論を得るには至らなかったが、数少ない資料による事実関係を総合・検討した結果、以下の仮説を提起することは差し支えないと思われる。

・セリーヌは1917年から翌年にかけて、『ユーレカ』という発明家向け小雑誌の編集部でメッセンジャーボーイを務めていた。この雑誌の出資者兼編集長はポール・ラフィットと

いう人物であるが、彼が手がけた出版物の中で最も普及していたのが、『ジュ・セ・トゥ』誌なのである。したがって、『ユーレカ』誌勤務時のセリーヌ（当時、23歳）が、すでに『ジュ・セ・トゥ』誌に目を通していた可能性はかなり高いと思われる。

・本報告書の1. 研究開始当初の背景(2)で述べたように、セリーヌは、1940年代前半、誹謗文書の再版に写真を挿入するため、『ジュ・セ・トゥ』誌をはじめとする雑誌を渉猟している。それゆえ、この時期に集中的な閲覧を行ったことは確かである。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究課題が資料体とした大衆雑誌は、その一部が参照されることはあっても、まとまった形で学術的考察の対象となることはほとんどなかった。それゆえ、本研究は重要な基盤研究たりうるものである。

(3) 今後の展望

本研究の最も重要な成果は、カミーユ・フラマリオンからセリーヌが受けた影響関係の指摘である。研究代表者によるこれを踏まえた論文の公刊が決定しているが（5. 主な発表論文等〔雑誌論文〕①を参照）、フラマリオンの他の著作へも射程を拡大し、敷衍した考察を継続・発表する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 木下樹親、「セリーヌのフラマリオン受容」、『ステラ』、第28号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2009年12月刊行予定、10頁、査読有。

〔学会発表〕（計1件）

- ① 木下樹親、「セリーヌとフラマリオン ―あるオカルト天文学者との邂逅―」、筑紫女学園大学人間文化研究所主催特別研究会、2008年2月8日、筑紫女学園大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木下 樹親 (KINOSHITA MOTOCHIKA)

九州大学・大学院人文科学研究院・専門

研究員

研究者番号：50380697